

# これは我々みんなの事業である

「狭い政治や宗教の立場を超え、あらゆる日本の良心を糾合し、力を合わせ、大きく美しく我々の事業を拡大してゆきたい。これは我々みんなの事業である。」

——中村 哲 (ペシャワール会報24号・1990年より)

この灯りを絶やしてはならない

——ペシャワール会の四〇年

PMS(ピース・ジャパン・メディカルサービス)総院長・ペシャワール会会長 村上 優まさる

## はじめに

二〇二三年はペシャワール会が発足して四〇年、来年は現地活動が始まって四〇年になる。よい機会なので、会の活動をふりかえりながら、中村哲医師の「思索と行動」を概観してみたい。活動地は彼が好んだ言葉「一隅を照らす」にたがわず、パキスタン・アフガニスタンの一部だが、行動とビジョンは気宇壮大である。その思索は現場に合わせて姿を変えることはあっても、基本は揺るぎない。会報に掲載された全報告を収録した『中村哲 思索と行動』(上)をご覧になって、中村医師への理解を深めていただきたいと切に願う。(下巻は来春刊行予定)

四〇年を便宜的に五つに区分してみた。①会の発足からハンセン病医療システムの基礎が形作られる一九八三年から一九九〇年まで、②戦乱の中、東部アフガニスタンへ医療活動を上げた一九九一年から一九九

九年まで、③地球温暖化によって引き起こされた干ばつを前に水事業に挑んだ二〇〇〇年から二〇一〇年まで、④PMS灌漑方式を確立させ、具体的な平和の拡がりを示した二〇一一年から二〇一九年まで、⑤中村医師逝去後。

中村医師の言葉で、この四〇年を表すとすれば「水が善人・悪人を区別しないように、誰とでも協力し、世界がどうなるうと、他所に逃れようのない人々が人間らしく生きられるよう、ここで力を尽くします。内外で暗い争いが頻発する今こそ、この灯りを絶やしてはならぬと思います」(ペシャワール会報二二六号、二〇一五年)につづる。

## 回一九八三年から一九九〇年まで

ペシャワール会発足の目的はパキスタンに赴任する中村医師の活動を支えるという点であった。中村医師自身の要請で、医療、大学・高校の同窓、山仲間、教会などの関係者八二名が発起人となり、六二二名の



価値観や秩序がその清算を迫られる状況で、いったい人間全体がどこに向かおうとしているのかも、誰にも本当の所は分からない。しかし、だからこそ我々は時代を超えて変わらぬ良心の灯を輝かせ、今後も長期に亘る現実との格闘を通して、人間の静かな告発者であり、同時に人間の弁護者・証人であり続けるだろう。これが過去七年に亘ったペシャワールでの活動の総括である」

回一九九一年から一九九九年まで

ペシャワール会の事務局長は一九九二年から村上が引き継いだ。事務局長の任務は中村医師の事業拡大に合わせた資金調達となっていた。会員一人一人の理解を得るために、現地活動の丁寧な報告を心がけ、ボランティアの中での役割分担を明確にして、機能的・継続的で一貫性のある事務局に成長していった。会報の充実や中村医師の帰国時に合わせた講演活動、『ペシャワールにて』（石風社）に始まる著作活動、メディアへの情報提供などは、広報担当の福元満治（二〇〇八〜二〇一九事務局長）が八面六臂のサポートをした。

一九九三年、アフガン難民が帰郷後、悪性マラリアが大流行してパニックに陥った。中村医師が抗マラリア剤の緊急支援を呼びかけ、それに呼応して会員と募金も増加した。一九九四年には中村医師がミッション病院当局と対立、退去指示を受けたのを機にミッション病院から独立した。同年、二

代目会長に高松勇雄氏が就任。この時期、中村医師はヒンズークシュ山脈の農山村無医地区にアフガン側三カ所、パキスタン側二カ所の診療所を建設している。

一九九八年、ペシャワール会の資金によって、ハンセン病根絶とアフガン難民など貧しい人々への医療を担うと同時に、各地の診療所を支援する病院を建設した。名称はPMS基地病院（PMS II ペシャワール会医療サービス、後に平和医療団・日本）。思えばここに、ペシャワール会の今日まで続く体制が出来上がったといえるべきであろう。

当時、ペシャワール会は一億円前後の活動費（うち自己資金は七〇％で、郵政省国際ボランティア貯金や外務省補助金などからの支援を受けた）で、九五％以上が現地に投入されるボランティア組織となっていた。中村医師は『学び・未来・NGO』（若井晋編、新評論、二〇〇一年）に、その経緯を報告する文章を寄せ次のように記している。

「私たちのモットーの一つは、『人の行きながらぬ所に行け。人のしたながらぬ事をなせ』である。人が蝟集する所ならば、誰かがやるであろう。誰もがやることなら、誰かがやるであろう。各国の撤退に逆らうように、私たちは次々と初期の計画を実施していった。（略）

私たちの関心は無論、現地の『健康』にある。一介の臨床家にとって重要なのは、患者が単に命をとりとめることだけではない。彼らが良き社会生活を送れるように配慮す

ることでもある。それができなければ、わずかでも慰めを与えることである。しかし、問題はあまりに圧倒的であり、実際に私たちが成しえたのは、人々と苦楽を分かち合いながら、戦争と迫害に疲れた者にさきやかなオアシスを提供できただけである。

近代化・民主化の名のもとに行われた蛮行、自国で喝采を浴びる国際援助の虚構、そしてそれらがもたらした破壊的作用については、すでにふれた。牧歌的な迷信は、別の科学的迷信に取って代わられ、それがまた別のつまずきを生んだ。カネ社会の浸透は人間の利己的欲望を拡大再生産し、伝統社会を容赦なく轆きつぶした。それに対する反動もまた、同様な権力の力学にとらわれる限り、狭い見識を脱することができず、悲劇を増し加えた。

しかし、壮大なヒンズークシュ山脈の麓で展開する悠々たる時の流れは、より大きな目でこれらの事象を眺めさせる。地球環境問題と開発経済成長とは、絶対に相容れない盾と矛である。人類が生物である以上、農村を捨て、都市化が無限大に進むことはありえない。カネがカネを生むバブル経済のフィクションは、資本の発生する貨幣経済の運命的な帰着である。資本は『市場』という妖怪に振りまわされ、健全な生産供給体系がすでに破綻しかけている。やがて私たちが見るものは、不必要に生産された製品のごみの山と、薪以下に下落した札束と、都市の廃墟なのかもしれない。



時には掘削中の井戸の底まで自ら下りて行った中村医師。(2001年9月10日)

それでもなお残るものとはいったい何であらう。実は、それこそが共に模索せねばならぬものであり、『人が人である限り失ってはならぬ共通のもの』を探る努力それ自体が、人々の狂気を鎮め、慰めと勇気を与えるものになるのではなからうか。一見異質な文化、異なる宗教・風土に規定された外皮の奥に、共通の人間を発見すること、そしてその悩みや悲しみ、喜びや慰めを共有しようと相互理解に努力すること、こうした中に、平和と共生への道が隠されているような気がしてならない」

## ◎二〇〇〇年から二〇一〇年まで

二〇〇〇年に中村医師の目前に現れたのは、干ばつで土漠化した田畑と、水不足のために飢餓で次々に死んでいく子どもたちの姿だった。地球温暖化の結果である干ば

つはアフガニスタンに顕著に現れた。

中村医師たちはこの地で二〇〇六年までに一六〇〇本の井戸を手掛けたが、二〇〇三年から始まる「緑の大地計画」、マルワリード用水路工事は、その実現可能性や、河に手をつけることに対する戸惑いと緊張が内在していた。しかし、万に一つでも可能性があれば前に進む決断をするのが中村医師であり、その中村医師の夢を支えるのがペシャワール会なのである。

二〇〇一年の九・一一事件後、アフガン人の関与がないにもかかわらずアフガンは空爆され、当時のタリバン政権は崩壊し、欧米に支援された政権が変わった。タリバン政権下では治安が改善していたので自由な診療活動が可能で、ナンガラハル州でも井戸事業を実施できていた。しかし、欧米軍駐留以降、徐々に治安が悪化して内戦状態に戻ると、PMSの活動も制約を受けるようになり、ダラエヌール診療所以外の診療所は政府へ譲渡された。

空爆でアフガニスタン問題に関心が高まり、中村医師の活動が知られるようになった二〇〇一年には会員も寄付も大幅に増加した。食糧危機支援のために集まった資金を「いのちの基金」とし、事業拡大を試みる素地ができた。一方で郵政省ボランティア貯金の助成は二〇〇二年の七六〇万円を最後に無くなり、翌年からすべて自己資金での運営となった。支援者の増加がなければ「緑の大地計画」は実現しなかったであろう。

会務は大幅に増えて事務局もボランティアのみでの運営は難しく、専従職員二名を雇用、事業拡大に対応した。二〇〇三年、会長は後藤哲也氏が引き継いだ。

「緑の大地計画」は伝統に学ぶ灌漑工法を採用、いわば自然と和解して、自然の力を利用して工夫する。その出会いは筑後川の山田堰であり、現在に至るまで山田堰に学び、アフガニスタンに合わせて応用している。自然と調和した工法は、地球温暖化が世界的に顕在化した現在、nature based solution(自然に基づく解決策)として認識され、専門家からも評価されるようになった。

中村医師はマルワリード用水路の完成の喜びを「地元農民の生存をかけた働きと日本人の良心の証」と題し次のようにまとめた。(ペシャワール会報一〇四号、二〇一〇年)

「七年の歳月をかけたマルワリード用水路の開通は、ペシャワール会始まって以来の壮挙であった。総工費十五億円は全て日本の良心的な人々の寄付によると同時に、地元農民も、文字通り生存をかけ、必死で働いた。その気魄が、三五〇〇ヘクタールの農地を回復し、十五万人以上の帰農を促した。摂氏五〇度を超える沙漠の熱風、米軍や軍閥の妨害を跳ね返し、自ら生きる道を開いたのである。(略)

沙漠が緑野に変わろうとする今、木々が生い茂り、羊たちが水辺で憩い、果物がたわわに実り、生きとし生けるものが和して暮らせること、これが確たる恵みの証しで

ある。世界の片隅ではあっても、このような事実が目前で見られることに感謝する」

### 回二〇二二年から二〇一九年まで

年ごとに治安悪化する中で、二〇〇八年八月二六日に現地ワーカーの伊藤和也君が殺害される悲劇が起きた。これまで中村医師を支える集団として、時には三〇名にも迫った現地での日本人ワーカーが全員帰国することになり、中村医師一人が現地にとどまった。ペシャワールの治安も一層悪化し、パキスタンとアフガニスタンの往來にも支障をきたした。二〇〇九年にはPMS基地病院を当時の事務長イクラムラ氏に譲渡して、PMS本部をアフガニスタンのナングラハル州都ジャララバードに移した。

医療活動は縮小せざるを得なかったが、灌漑事業は二〇一〇年以降拡大していった。一七年までにPMS灌漑方式の基本設計ができ、一九年には中村医師がPMS方式の完成形と喜んだカマ第一堰が完工。

これら全ての調査、設計や施工、監理が中村医師の肩にかかる一方で、PMS土木技師たちが成長し、熟練工が育っていった。JICA（国際協力機構）の招きでPMSスタッフが来日し、山田堰視察、土木技術研修や意見交換が年二回行われたのもこの頃である。FAO（国連食糧農業機関）とPMSの共同事業ではミラーン訓練所が完成し、現場での技術者などの研修が行われた。

中村医師は多忙を極めたため、日本から

ワーカーOBが短期現地入りしたが、それも二〇一五年以降は困難となった。中村医師は、藤田千代子を室長とするPMS支援室を強化して、PMSと直接情報交換し、将来にわたって長期に支援ができる関係を作るようにと言い続けていた。村上が会長に就いたのはこの時期である。

二〇一九年十二月四日に中村医師が亡くなった。奇しくも当日発行された会報一四二号に掲載された文章を引用する。

「水の仕事を始めてから十九年、干ばつは動揺しながら確実に進行しているように思われます。（略）川沿いも気候変化で濁水と洪水が併存し、年々荒れていきます。温暖化の影響はここアフガニスタンでも凄まじく、急速に国土を破壊しています。（略）」

とまれ、この仕事が新たな世界に通ずることを祈り、真っ白に砕け散るクナール河の、はつらつたる清流を胸に、来たる年も力を尽くしたいと思います。

二〇一九年十二月 ジャララバードにて

### 回二〇二〇年から今日まで

中村医師の希望を引き継ぐべく、事業継続を優先して三年が過ぎた。灌漑が行き届く地域を一步離れれば、依然として干ばつ地域が拡がっている。荒れていく大地に棲まねばならない人々は多く、飢餓はアフガニスタン最大の問題である。

二〇二二年暮れから三回のアフガン長期訪問により、現地との交流は密になった。わたしたちは、政権がどうであれ、この地で人間らしく生きることが困難な人々を支え続けるだろう。それが中村哲医師の歩んだ道である。

（追記）八月二八日、懸案だったJICAとFAOの共同事業が正式に調印された。PMS方式灌漑事業普及を目的に日本が国連に資金提供するもので、PMSは技術支援を求められている。